



2024年 受難節 黙想の手引き

“この人は、誰なのか”

2月14日～3月31日（復活祭）

【受難節について】

◆受難節（レント）とは、復活祭からさかのぼり主日を除く四十日前から始まります。

復活祭の日は、毎年変わります。それは、復活祭の日が「春分の日を過ぎた最初の満月の次の日曜日」と決まっているからです。ですから受難節も毎年変わります。

受難節の最初の日は、必ず水曜日になり、「灰の水曜日」と呼ばれます。「灰」とは、悔い改めを意味しています。

そして、六回の主日を経て、三月二十九日の金曜日は、「受難日」（グッドフライデー）と呼ばれ、主が十字架にかかった日を覚えて

礼拝を捧げます。今年も、「受難日礼拝」を捧げる予定です。夜七時です。今から予定に入れてください。そして、三月三十一日（日）の「復活祭礼拝」へと続きます。

ホノルル教会では、一年間の営みの中で、特にこの受難節、そして受難日、復活祭を霊的高嶺と位置付けています。

今年も、さらなる十字架と復活の深みへ、恵みの豊かさの中へ導かれてまいりましょう。

◆受難とは、イエスが十字架で受けられた苦難を意味します。復活祭前の最後の一週間を受難週、英語ではパッション・ウィークと言

います。パッションとは、情熱と訳されますが、もう一つ「痛み」という意味があります。もともとは「痛み」の意味が先でした。それが情熱という意味も持つようになったのです。

なぜなら、愛の質とは、どれだけ愛する者のために痛み苦しみを負うかという事で計られるからです。痛み苦しみを負ってまでも愛さずにはおられない、その想いが情熱という言葉になりました。

イエスが受けた十字架の痛み苦しみ、それは、それほどに私たちを愛してくださった神の愛の情熱の現れなのです。

◆これまで毎年テーマを決めて受難節の期間を過ごしています。

今年の受難節は、「この人は、誰なのか」(マタイ二十一章十節)をテーマに、おもにマタイ福音書から、イエスの十字架のお姿に迫りたいと思います。子ロバに乗り、悲しみもだえて祈り、無抵抗で捕らわれ、十字架にかかった「この人は、誰なのか」この事を思い巡らしつつこの期間を過ごしましょう。

過去の受難節のメッセージは、教会のウェブページから視聴することができます。

◆カトリック教会では、受難節の期間、肉食を断ったり、断食をしたりします。ホノルル教会では、特に守るべき規定は設けていません。

ん。大切なのは、主の十字架に想いを向けることです。そのために時間を確保することや、想いを集中するための工夫を各自が生活の中で設けてみましょう。

【黙想の手引きの用い方】

◆黙想は、出来る限り毎日続けることが理想です。チャレンジしてみましょう。ただ、出来ない日があっても、めげないで、まとめて数日でも、飛ばしても、とにかく続けることが大切です。

◆一人で黙想すると共に、仲間と分かち合い時を持つならば、より恵みが深まるでしょう。是非、数人で分かち合いの時を持ってください。

◆黙想のポイントは、正解を求めているものではありません。自分自身が考えることを求めています。考えることに価値があります。

◆聖霊の導きを祈り求め、御言葉を読み、黙想し、気づかされたこと、感じたこと。決心したことなどをメモしておきましょう。

【受難節の問いかけ】

「あなたにとって、イエス・キリストの十字架とは、何を意味するのでしょうか？」

キリスト教にとってではなく、みんなにとってではなく、自分自身にとっての意味を考えてみましょう。

「イエス・キリストの十字架は、私にとって

*****です。」

※二月十一日（日）～十七日（土）

棕櫚の主日 マタイ二十一章一節～十節

「この人は、誰なのか」

イエスは、群衆の大歓声を受けてエルサレムに入られた。群衆は、棕櫚の葉（なつめやし）を道に敷いてイエスを迎えたことから、この日は「棕櫚の主日」（Palm Sunday）と呼ばれるようになった。

* 五節は、ゼカリヤ九章九節の預言の成就である。王は、軍馬に乗るはずだが、イエスは、なぜロバナなのか、それも子供のロバナのだからか。その意味を考えてみよう。

* 七、八節 この群衆たちの行為は、ローマ

帝国の圧政からユダヤ王国を解放してくれる革命的リーダーとしてイエスを迎えている事を現わしている。九節「ダビデの子」とは、ダビデ王国を復興するという意味のメシヤを現わしている。

この群衆の期待とイエスの姿のギャップは、何を意味しているのだろうか。

* 「ホザナ」（万歳）と叫んでいた群衆は、この数日後「イエスを十字架につける」（マタイ二七章二十二、三節）と叫び始めた。なぜ、このように変化したのだろうか。

* 十節「この人は、誰なのか」 この人イエスは、いったい誰なのか、この問いかけを深く考えてみよう。

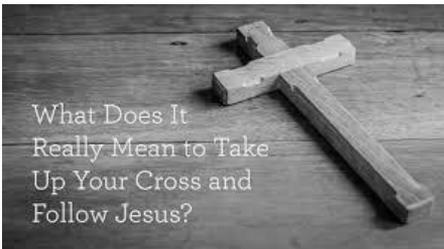
十四日（水）「灰の水曜日」（Ash Wednesday）

灰とは、悔い改めを現わす。旧約時代には、実際に衣を裂いて、灰の上に座って悔い改めを表現した。

悔い改めとは、「方向転換」という意味があり、間違った道から正しい道に向きを変えることを現わしている。

その時「間違っていることを認める」と「正しい道を選ぶ」という二つの事が必要となる。

私たちの「道」は、正しい方向を向いているだろうか。今一度、「この人」に焦点を合わせてみよう。



キ二月十八日（日）～二十四日（土）

マタイ二十六章三十六節～四十六節

「ゲッセマネの祈り」

最後の晚餐を終え、いよいよ捕縛され、十字架に向かっていく直前、イエスは弟子たちを連れてゲッセマネの園（オリーブの油を絞る場所）で祈られた。

イエスは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて行かれた。祈りの途中で眠ってしまった弟子たちと、悲しみもだえるイエスの姿は対照的だ。

「この杯」（39）とは、これからイエスが受ける十字架の受難のこと。

* 「わたしは、悲しみのあまり死ぬほどです。」
（38） イエスの死ぬほどの悲しみとは、何に対する悲しみだろうか。

* 三十九節のイエスの祈り。この祈りの意味をじっくり深く考えてみよう。

* このイエスの祈りに対して、眠ってしまったている弟子の姿は対照的である。弟子たちは、なぜ眠ってしまったのだろうか。

* 「立ちなさい。さあ行こう」（46）このイエスのことばに込められたイエスの覚悟を、語調と共に感じ取ってみよう。

十二月二十五（日）～三月二日（土）

マタイ二十七章十五節～二十六節

「バラバとイエス」

バラバとは、有名な囚人であり、暴動、殺人、強盗を犯して死刑判決を受けた者。

過越しの祭りには、囚人を一人恩赦する習わしがあった。恩赦には、イエスではなく、バラバが選ばれた。

ローマ帝国から任命された総督ピラトにとって最も重要なことは、暴動を起こさないこと。その事を祭司長たちは良く知っている。総督の弱みに付け込んだ策略は成功した。

* 牢獄に囚われ、刑の執行を待っていたバラバにとって、この恩赦は何を意味したのだろうか。

* バラバは、ゴルゴダの上で十字架にかかっているイエスを見ただろう。その時の彼の心境はどうだったのだろうか。

* イエスが死んで、バラバが生きた。この事実の意味を深く考えてみよう。



†三月三日（日）～三月九日（土）

マタイ二十七章二十七節～三十八節

「十字架を負ったシモン」

クレネとは、エチオピア。そこから過越しの祭りを祝うため巡礼の旅をしてエルサレムに来ていたのがシモン。

十字架とは、呪い（神から捨てられた）の象徴。十字架に触れるということは、最悪の状況、呪いと汚れがうつる、末代にまで至る恥であった。

たまたま、そこにいたシモンは「無理矢理に」十字架を背負わされた。

*この時のシモンの心境は、どうだったろうか。

*後に、彼はイエスをメシヤとして信じたと言われている。それが史実だとするなら。

マタイ十六章二十四節を参照

シモンだけが、文字通りに、イエスの十字架を負った人物となった。

シモンだけが、十字架を負ってイエスの後について行った人物となった。

シモンだけが、自分を捨てて十字架を負った（自分の意志ではなく、十字架を負わされた）人物となった。

*シモンがイエスの代わりに十字架を負ったとき、イエスはどう思ったのだろうか。

十一月十日（日）～十六日（土）

マタイ二十七章三十九節～四十四節

「十字架から降りないイエス」

通りすがりの人、祭司長と律法学者、隣の十字架にかかっている強盗は、「十字架から降りてみる」「自分を救え」と罵った。

立場のまったく違う三者たちが、イエスに発した言葉は同じである。

それでも、イエスは十字架から降りなかった。降りられるのに降りなかった。

* イエスにとって、十字架から降りることは、何を意味しているのだろうか。もし十字架から降りたら、どうなるのだろうか。

* 「十字架から降りてみる」という言葉と似

たような言葉が、私たちの内にあるだろうか。

* 「神の子なら」（43）と嘲られたイエス。神の子であるのに、十字架で死なれたイエス。その事の意味を深く考えてみよう。



※三月十七日（日）～二十三日（土）

ゲストスピーカー

大嶋重徳牧師（鳩ヶ谷福音自由教会牧師）

✠受難週 パッションウイーク

三月二十四日(日)～二十八日(木)

マタイ二十七章四十五節～五十節

「イエスの絶唱」

イエスは大声で叫ばれた。絶唱である。

*この絶唱のことは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。イエスが神から見捨てられたことは、イエスにとって何を意味しているのだろうか。

そして私にとって何を意味しているのだろうか。

*これはイエスにとって敗北の叫びではなく、勝利の叫びである。なぜ勝利なのだろうか。



†三月二十九日（金）受難日

マタイ二十七章五十一節〜五十六節

「裂けた、揺れた、開いた」

神殿には、至聖所と聖所を分ける仕切りの幕があった。その幕が裂けた。

地が揺れ動いた。岩が裂けた。墓が開いた。

このような現象が起こったことの意味を考えてみよう。

*幕が裂けた。

*地が揺れ動いた。

*岩が裂けた。

*墓が開いた。

*百人隊長の「この方は、本当に神の子であった」という告白の意味の深さを考えてみよう。

十一月三十日（土）

マタイ二十七章五十七節〜六十六節

「イエスの埋葬」

イエスの身体は、墓におさめられた。番兵が立ち、封印がほどこされた。絶対にイエスを墓から出さないという悪の力を感じる。

マリヤたちは「墓の方を向いて座っていた。」(91) 復活の前の姿が象徴的に記されている。

もしイエスが復活されなかったら、私たちも墓に向かう人生で終わっていただろう。

第一コリント十五章十七節〜二十節を参照



キ三月三十一日（日）復活祭

マタイ二十八章一節〜十節

「イエスの復活」

* 一節 マリヤたちが墓を見に行った。その時の彼女たちの心境は、どうだったろうか。

* 六節 み使いが「ここにはおられません。」と言われたときの、彼女たちの反応は？

* 八節 喜びに溢れて走っているマリヤたちの姿を想像してみよう。マリヤ五十歳近い、当時の高齢者。

* 九節 復活のイエスに出会ったマリヤたち。このイエスの「おはよう」（別訳「喜びがあるように」）の意味を深く考えてみよう。



† 3月29日（金）7PM 受難日礼拝 礼拝堂
主イエスの十字架を想い、礼拝を捧げます。

† 3月31日（日）8:45AM 復活祭礼拝 礼拝堂
主イエスの復活を喜び、祝いましょう。

